Margaret Gatty, *Parables from Nature* と ヴィクトリア朝期エンブレムの復興 —"A Lesson of Faith" を中心に

松　田　美作子

Margaret Gatty (Mrs. Alfred Gatty, 1809–1873) は、これまで日時計研究者、エンブレム作者、子供向け本の著者、当時人気を博した子供向け雑誌、*Aunt Judy's Magazine* の編集者兼執筆者、そして作家である娘 Mrs. Ewing との関係で取り上げられてきたヴィクトリア朝の女性に付与されたジェンダー・ロールに縛られず、多様な業績をあげた女性たちのひとりである[1]。とくに、*Aunt Judy's Magazine* は、子供向け文学の歴史において重要な1860年代、1866年5月に発刊され、ガティ家の家計を大いに潤すとともに子供向けの雑誌の発展に寄与した[2]。しかし、こうした文学的な側面のほかに、彼女はもうひとつ別の側面を持っていた。マーガレットは、レジャーをはるかに超えた専門的フィールドワークを行い、長く信頼された *British Seaweed* (1863) を執筆した女性ナチュラリスト－サイエンティストであった。もちろん彼女の生涯は、ガッティ夫人として牧師である夫、アルフレッドの妻、10人の子供たちの母親、教区の子供たちにも尽くすよき家庭人としての側面を無視しては成り立たない。彼女の死の1年後、1874年にシェフィールド近郊の教区エクルズフィールドの教会内に、千人以上の子供たちによって設置された銘板（タブレット）が証明しているように、そこには理想的な母親像としての彼女が描かれ、彼らのために彼女が執筆した数々の本に対する感謝が述べられている〔**図1**〕。さらにそれに加えて、親しかった友人たちによって寄贈されたステンドグラス・ウ

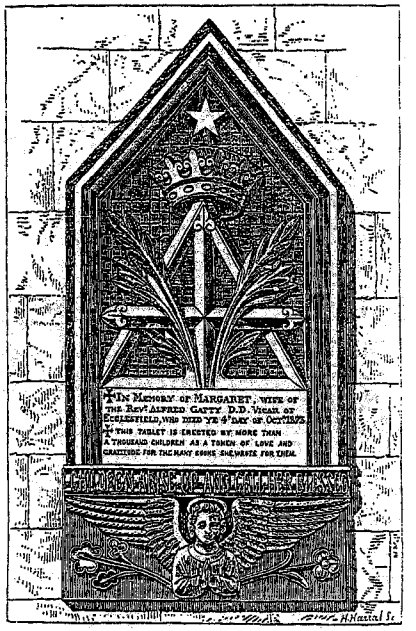

図1
Memorial Tablet to the late Mrs. Alfred Gatty (Alfred Gatty, *Life at One Living*, London: Bell & Sons, 1884), p. 167

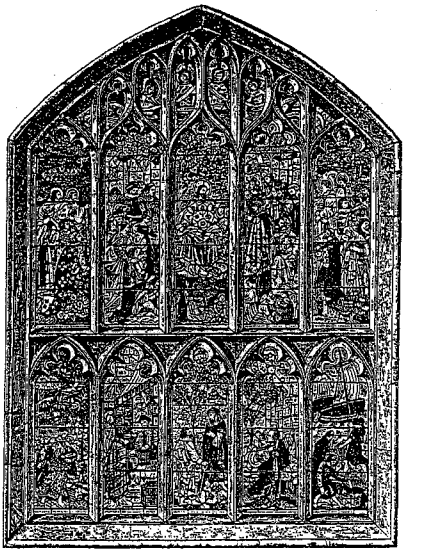

図2
Margaret Gatty Memorial (Parable) Window (Alfred Gatty, *Life at One Living*, London: Bell & Sons, 1884), p. 165

ィンドウに、彼女のもうひとつの側面がみてとれる〔図2〕。パネル上段の中央に "robe of righteousness" を着たキリストがおり、50人ほどの子供も含めた聴衆に説教をしている。夫のアルフレッドは、この窓を 'The Parable Window' と名づけ、マーガレットの家庭内外での活動を記念しようとしたが、彼女はこうしたパネルに描かれる辛抱強く説教を聴いている聖人や聖母のように描かれていない。鮮明でない図からではどの人物が彼女か、はっきりみてとれないが、アルフレッドの言葉がそれを明らかにしている。マーガレットは、キリストと同様のローブをまとい、下段の5

つの区切りで描かれているキリストの一連の説教の場面に倣って、周囲の人々に教えを授けているのである。

> ... in the midst of them is the full-length form and likeness of the lady, who thus Commemorated. She also wears a robe corresponding with that of the Great Teacher. Over this rich scene is the motto on scrolls which are held by angels. 'Blessed are they that hear the word of God and keep it.' Below is inscribed, 'Blessed are they which do hunger and thirst after righteousness, for they shall be filled.' In the lower tier of lights, the five compartments are ... filled ... (with a) series of our Lord's parables ... mark(ing) the successive steps in the Christian life ... I have tried to name this 'The Parable window.' She, to whom memory it was erected, endeavoured in all humility to follow her Lord's example, and 'Speak many things unto them in parables.'[3]

彼は、家庭内にとどまらず、彼女が自らの自然科学的な活動をparables（寓話）の形で宗教的な目的に活用していたことに賛辞を述べている。自然探求の活動を行いながら、彼女は自然のなかにdivine imageryを常に見ていたのである[4]。自然を探求することによって、より深い道徳的かつ宗教的な目的に達することが評価されたということは、子供の教育においても道徳、宗教的側面が重視されていた時代には自明のことである。一例にすぎないが、当時一般向けに出版された道徳的、宗教的な事項を、さまざまな聖職者の説教や逸話、寓話や文学作品から引用して、読者、特に説教者の助けとなるよう編集された事典のひとつ、John Bateの*A Cyclopaedia of Illustrations of Moral and Religious Truths; consisting of Definitions,*

Metaphors, Similes, Emblems, Contrasts, Analogies, Statistics, Synonyms, Anecdotes, Etc., Etc. (1865) で「子供」を引くと、"Religious Teaching of Children" という独立した項目があり (114)、両親が子供に信条をつめこんだりする危険を戒めている。そして「母親への忠告」(Advice to a mother) という項目において、信仰に根ざした子育てが強調されている。16か条にまとめられた助言は、子供に嘘をついてはならないといった一般的な戒めとともに、神の存在を常に意識して子育てに関わるよう説いている。その点に触れた箇所を、次に引用する。

1. First give yourself, then your child, to God. It is but giving Him His own. Not to do it is robbing God.
2. Always prefer virtue to wealth—the honour that come from God to the honour that comes from men. Do this for yourself, do it for your child.
3. Let your whole course be to raise your child to a high standard. Do not sink into childishness yourself.

. . . . .

10. The knowledge and fear of the Lord are the beginning of wisdom.
12. Pray with and for your child, often and heartily. (Bate, 606–07)

理想的な助言ではあるが、神への信仰なしに子供の教育は始まらず、女性が家庭において信仰の柱としての役割を果たすことが社会的に求められていたことが伺える。マーガレット自身、その点を十分承知しており、Sheffieldが指摘したように、刊行された彼女の著作の中に信仰への懐疑はみあたらないといってよい。実人生において、幼子を一度ならず失い、晩

年重い病と苦痛にさいなまれ、私信においては神に恨み言をつぶやくことはあっても (187–90)。幼子の死や病苦といった人生における苦難は、しかし彼女に新たな挑戦をするきっかけともなった。男児用のブーツをはき、浜辺で辛抱強く何時間も海藻や植虫類を採取して標本を作り、妻、母親としてではない活動的で個人的な時間をすごしたのである。

当時、浜辺に出かけてフィールドワークを行い、科学的な考察を行う女性はまれであったが、彼女は多くの男性ナチュラリストと交流をもった。そのなかの一部から手ひどい中傷や非難を浴びせられたかは想像にかたくないが、たとえば、彼女が藻類を研究するきっかけとなった本、*Phycologia Britannica, a History of British Seaweeds* (1846–51) を著した著名な植物学者でダブリン大学教授であったWilliam Henry Harvey (1811–66) との書簡は16年間に渡って500通以上残っており、(彼女にあてた彼の書簡は1通も残っていないが) 男性ナチュラリストたちとの交流において、いかにマーガレットの探求が真剣なものであったかを語っている (sheffield, 100)。彼女自身が妻、母という役割を脱ぎ捨て、ヘイスティングスの浜辺で標本採集に没頭し、いかに楽しんでいたかは現存する男女のナチュラリストたちとの書簡から明らかであり、周囲の女性の友人たちにもそのような活動を薦めている (Sheffield, 114)。特に友人への書簡のひとつでは、自身を "alogologist" と呼び、新種と思われる標本も、惜しみなく交流のあった同好の男性たちに送った。しばしば発見者が女性や中流階級に属さない人間であった場合、それは黙殺されたり、その新種の名づけ親となることはなかったが、マーガレットは、なんとか2つの新種の名付け親となる栄誉を与えられた (Sheffield, 110)。200種ほどの藻類について解説をほどこした*English Seaweeds* (1863) は、彼女が高い科学的能力をもっていたことを証明しているが、あくまで専門的な学者としてではなく、女性としての立場をわきまえ、植物学のポピュラライザーとしての立場で活動を続け

たのであった[5]。

そうした家庭外での活動をしながら、マーガレットが強く自覚していたのは、当時の社会が女性に求めた主な役割、家庭において信仰の柱として子供たちを教育することであった。マーガレットの父は、ネルソン提督のヴィクトリア号の従軍牧師であった。大変な愛書家であり、その蔵書にはクォールズをはじめとする古い時代のエンブレムブックも含まれており、マーガレットがのちに『エンブレム集』を作成したのは、父の蔵書の影響なしには考えられないことである。そうした牧師の娘、妻として自身に課されていた宗教的な使命と、自然に接して科学的な考察をおこなうことと、これらがマーガレットの人生において、どのように共存していたのであろうか。宗教と科学、または信仰と理性という二項対立は、この時代を特徴づけるものであるが、これらを両立させる道筋を暗示しているのが、*Parables from Nature* (1855–71) であろう。

1850, 60年代を通して書き継いだ彼女の代表作といってよい*Parables from Nature*は、5連作からなり、第1, 2作は彼女自身が、第3作は娘たちが、第4, 5作もおそらく娘たちが、そしてギフト・ブックとして1861年と65年に出版された豪華版では、ウィリアム・ホルマン・ハント、ジョン・ミレー、ジョン・テニエルなどそうそうたる画家の手によって挿絵がほどこされた。出版されるやいなやフランス語、イタリア語、ドイツ語などに翻訳されており、人気のほどが伺える。そしてこの本からは、自然を科学的に観察するまなざしと宗教的なまなざしが結びついて、子供たちは神と直接に関係を結ぶことが可能であると考えていた彼女の信念が看守できる。本論では*Prables from Nature*から 'A Lesson of Faith' を取り上げ、宗教と科学との関連を探り、この作品もまた、ヴィクトリア朝におけるエンブレマティックな実践のひとつであったことを跡付けたい。

*Parables from Nature*は、中産階級の家庭の子女と両親に向けてかかれた

もので、出版社Bell and Dadlyの広告には、この作品が "would be both instructive and interesting to school children" と謳われている (Sheffield, 174)。子供にとって身近な自然界の事象を通じて、生と死、希望、時間や仕事、従順や運命という人生にとって重大な問題を理解させ、最終的に信仰こそやがて訪れる死の恐れを開放し、来世に希望を与える唯一無二のものであるということを教えようとしたものである。おそらく日曜学校で役立てられたであろうし、広く歓迎されたであろう。実際、家族ぐるみで親交のあった詩人テニソンの妻エミリーは、この本を大変気に入り、息子ハラムもシリーズ中の一篇、'Daily Bread' を特に気に入って、父に読み聞かせていたことを手紙につづり、またキプリングも自叙伝 *Something of Myself* (1897) で、*Parables from Nature* に影響を受けたことを告白している (Sheffield ed., *Parables from Nature*, introduction, vi)。ヴィクトリア朝時代、parable は emblem や fable といった単語と基本的に同義で用いられていた。絶大な人気を誇った洗礼派の牧師、伝道者であり、エンブレム復興者の一人、チャールズ・H・スパージョンは、校長を務めていたロンドン南部、メトロポリタンにある自身が創始した神学校の生徒に行った講義、Lectures to My Students: Being Addresses Delivered to the Students of the Pastors College, Metropolitan Tabernacle の第3シリーズにおいて、聴衆に聖書の教えを理解させるために、説教にはイラストレーションの技術がいかに大切かを説き、そしてよいイラストレーションをするために材源をどこからみつけられるかを講義している。家に窓を作る主な理由が光を家の中に入れるためであると同様、心に信仰の光を入れるため、窓と同等の効果を持つ parables, similes, and metaphors を用いて、説教の主題を説明するよう助言している。(Spurgeon, 2–4) 7回にわたる講義のタイトルを挙げる。

1. Illustrations in Preaching
2. Anecdotes from the Pulpit
3. The Use of Anecdotes and Illustrations
4. Where Can We Find Anecdotes and Illustrations?
5. Cyclopaedia of Anecdotes and Illustrations
6. Books of Fables, Emblems, and Parables
7. The Sciences as Sources of Illustration (Spurgeon, vii)

6回目の講義において、Fables, Emblems, Parablesこれら3つがまとめて扱われており、スパージョンはそれらが寓意によってある道徳的真実や信仰を伝えようとしている点において、同義であると考えている。(Spurgeon, 93–95) 彼はエンブレムについて述べた箇所で、ミルトンの本とでも取り替えたくないほどクオールズの詩文を大変高く評価し、生徒たちに入手して読むよう薦めている。ただしクオールズの図版については 'extraordinary' と一言で片付けてしまい、(Spurgeon, 124) ルネサンス期の寓意の伝統が正しく理解されていないことがわかる（ヘルトゲン、230)。クオールズは、17, 18世紀を通じて出版され続け、19世紀にはいると、新たな図版で何度も出版され、トータルで50版以上が存在する。彼の言葉からもクォールズの衰えない人気が確認できる。16, 17世紀のエンブレム作者、とくに宗教的エンブレムの作者にとって、図版は肉体、詩文は魂であり、そのバランスが重視され、信徒は図版と詩文によって黙想を行い、ディヴォーションを得るのであった[6]。マーガレットは父の蔵書から、アルチャーティ、クォールズ、カッツ、ファーリーといったルネサンス期のエンブレムブックに親しんでいた。ここで詳しく述べることはできないが、彼女の『エンブレム集』は、カッツやティエポロといった古い時代の作者から得た図版にはその旨が記されており、エンブレムを構成す

る3部位を正しく理解し、エンブレムを作成している。そして『エンブレム集』の序で、ディヴァイスとエンブレムがかつては別のものであったが、今ではより一般的な後者で呼びかわすようになったことなど、エンブレムについて学識を披露しながら、最後にクオールズへ言及する。

> ... We can hardly remember the time when Quarles was not dear to us, and what is more, our affection for him remains with us still. Nay, our intimate acquaintance with and love for his works paved the way for further interest in older books of the same kind, which fact may be accepted as a cause of the present volume being offered to the reader. (*A Book of Emblems*, xii)

クオールズがエンブレムを "silent parable" と定義し、ディヴォーションを目的に作成したことを、マーガレットは理解していた。16, 17世紀の宗教的なエンブレムは、第一にディヴォーションの手助けとなるように作られたが、マーガレットのエンブレムは、もともと *Aunt Judy's Magazine* に掲載されたものであり、子供にも歓迎され理解できるものとなっている。しかし、根本にある考え方は、近代初期のそれと変わらない。アレゴリカルな手法によって道徳的真実や信仰を理解させようというのである。そして序において、われわれの時代はエンブレムに対する嗜好は子供にとって自然なものであると述べている (Kats, xi)。

キリスト教的な世界創造では、自然界に存在するすべてのものが、何らかの隠された意味をもつ。神の被造物に一切無駄、無意味なものはなく、森羅万象は神の計画（プロヴィデンス）のなんらかのサインを表している。そのような世界観は、中世のキリスト教釈義学の伝統を基本的に継承したルネサンス期のエンブレム にも共有されていた。したがって、あら

ゆるものは、表象されると同時に解釈されうるのである。それはタイポロジカルなこの時代の傾向と一致し、彼女にとってエンブレムを作成することと、parableを書き、それに添える挿絵を描くことには大きな差異がないことであった。こうした観点で具体的に "A Lesson of Faith" をみていきたい。

この寓話は、キャベツ畑で卵を産み終え、瀕死の蝶の母親から卵の世話をしてくれるよう頼まれたCaterpillar（青虫）が主人公である。母親は死んでしまい、どうやって世話をすればいいのかわからず途方にくれて彼女は、どの動物に相談しようか迷う。そして最後に雲雀に相談するとよいと思う。

> ... and she fancied that because he (the Lark) went up so high, and nobody knew where he went to, he must be very clever, and know a great deal; for to go up very high (which she could never do) was the Caterpillar's idea of perfect glory. (3) [7]

雲雀は 青虫に卵が彼女と同じキャベツの葉を食べること、そして卵は蝶ではなく、彼女と同じ青虫になることを教える。しかし彼女は雲雀のいったことが信じられない。

> "I thought the Lark had been wise and kind," observed the mild green Caterpillar, once more beginning to walk round the eggs, "but I find that he is foolish and saucy instead...." (4–5)

さらに雲雀が「僕の言うことを信じるならば」と続けるので、再び青虫が「あなたの言う事はなんでも信じるわ」と答えると、決定的な不信を招く

ようなことを彼は言う。

> "Then I'll tell you something else," cried the Lark; "for the best of my news reminds behind. *You will one day be a Butterfly yourself.*" (5)

青虫は叫び、怒り出す。"You jest with my inferiority..." 雲雀が「僕の言うことはなんでも信じるといったのに」と返すと、青虫は、信じるのは "everything that it is *reasonable* to believe" だと断言する。卵は青虫に、そして地を這う青虫は羽をもった蝶になるなんて、ナンセンスだとくってかかる。雲雀は説得にかかるが、耳を貸さない青虫と次のような会話をする。

> ... "Fool, to attempt to reason about you cannot understand! Do you not hear my song swells with rejoicing as I soar upwards to the mysterious wonder-world above? Oh, Caterpillar! What comes to you from thence, receive as *I* do upon trust."
>
> "That is what you call—"
>
> "*Faith*," interrupted the Lark.
>
> "How am I to learn Faith?" asked the Caterpillar— (5–6)

その時、彼女の傍らで卵から青虫が孵ったのである。青虫は第1のwonder（＝卵は青虫になる）が可能なら、第2のwonder（＝青虫は蝶になる）も可能であろうと周りのすべてのものに自分が蝶になると言い続ける。しかし、誰も彼女の言葉を信じようとしない。やがて彼女はさなぎになり、蝶となり、死を迎えるに当たって、次のように言う。

"I have known many wonders—I have faith—I can trust even now for what shall come next!" (6)

理性で判断できることがすべてではない、空の上の神秘的な世界から来た雲雀[8]が青虫に伝えたいことは、信仰をもつことであった。なかなか自分が蝶になると信じられないでいる彼女は、卵から小さな青虫が生まれ出るのをみて、ようやく雲雀のいったことが正しかったと悟る。

蝶の変体という自然界の現象から、作者が導き出したい教訓は、図版をみれば一層明確となる[9]〔図3〕。ベッドに臥している女性が死期を迎え、彼女の霊体が天に向かっていこうとしている[10]。傍らにはベビーベッドがあり、幼子が眠っているが、これはこの本の主な読者が子供たちであるこ

図3
A Lesson of Faith

図4
ウィリアム・ブレイク『身体の上をただよう魂』(19世紀初頭)、パリ、装飾美術図書室所蔵

とを考慮しているのであろう。この図版と青虫の自覚を結びつけることは難しいことではない。人は誰でもこの世での肉身をもった生を終えると、魂のみの霊身となって神のもとへ向かう。死後の永遠の世界への信仰こそ生における数々の苦難や懐疑を乗り越えて生きる支柱となることを訴えようとしている。もちろん、青虫に教えを授ける雲雀は、天上からの使者と解釈できよう。*Parables of Nature*には、動物寓話の形をとっても死や苦難が人生の一部として多く登場するが、そうした苦痛は神の摂理を受け入れ、信仰を堅固にすることによって乗り越えられるというマーガレットのメッセージに集約される (Sheffield, 173)。子供にとって身近な蝶を題材にして自然界の秩序を描くことによって、より深い道徳的な教えを学ばせるということから、科学的知識だけからでは人は生死を真に理解することはできず、信仰とバランスをとるべきであるという彼女の信念がうかがえる。

この寓話の題、"A Lesson of Faith" は、エンブレムでいうモットーにあたる。そして図版と物語を加えると、エンブレムの3部位が完成する。普通、エンブレムに付される文は、エピグラムと呼ばれていたことからわかるように、十数行の短い詩文であることが多い。しかし、クオールズのエンブレムの詩文も数ページにわたる長いものであったし、長さは厳密に考慮されない。これら3部位の連動から、ひとつの教えが導き出されていることから、マーガレットの書いたParablesは、エンブレムと理解してよいと考えられる。彼女がいかに信仰を固く守ろうとしていたかは、死も迫った病床で苦しみながら、『エンブレム集』の最後のページに出版者ベルに反対されてもマーガレットの強い希望でいれられたParabolicにみてとれる。

An old man, bowed down with infirmity,

Because at last bedridden. His friends
Condoled with him: one sat by his bed-side and wept.
"Rejoice rather," said the sick man; while I
Was up, my eyes were bent to the earth: now I
am down, they are turned upwards—to Heaven." (124)

マーガレットの活動した19世紀半ばは、オクスフォード運動をはじめとする宗教刷新の動きがあり、ヘルトゲンはヴィクトリア朝期のエンブレム復興運動の動機について、宗教的な動機を第一に挙げた (244)。マーガレット・ガッティの『エンブレム集』や*Parables from Nature*は、子供向けに描かれた作品であるが、宗教的な目的を持っていた点で、同時代のこれらの動向の一端に位置づけられる。女性として、社会的制約を受けながら自然観察から生み出したparablesは、ルネサンス期の初期のエンブレム同様、娯楽性を保ちながら教訓を生み出している。特に信仰に関して、"A Lesson of Faith" において、理性で説明できないゆえに否定する愚かさを描き、理性や知性のフィルターをとおさず、直接神とのディヴォーションによって信仰を築くことを重要視したことは、彼女が親しんだクォールズをはじめとする16, 17世紀のエンブレム作家と彼女を結び付ける。神が在ると受け入れられたら、在ることを疑わずディヴォーションを通して信仰を堅固にしなくてはならない。そうして人は、死や病といった現世の苦難を超え、死後の永遠の生命へ歩みだせるのである。

とくに藻類についてであったが、身近な自然現象を観察し、自ら科学的な知識の習得に励んだマーガレットは、幼い子供たちの心を導くのに、そうした科学的な知識を神とのディヴォーションへの道筋として用い、挿絵と寓話によってエンブレマティックな作品を創造したのである。

注

1 マーガレット・ガッティの詳しい生涯に関しては、Christabel Maxwell, *Mrs. Gatty and Mrs. Ewing*, London: Constable & Co., 1949を参照。

2 主なところでは、1863年にチャールズ・キングスレーの*The Water Babies*, 1865年にルイス・キャロルの*Alice's Adventure in Wonderland*が出版され、マーガレットは*Aunt Judy's Magazine*でルイスやアンデルセンの英訳を掲載し、紹介した。ただしアンデルセンの作品に彼女は満足を覚えず、それらを "only quaint and taught nothing; imperfect 'devices'—the body without the soul" と述べた (Juliana Horatia Ewing, "Margaret Gatty" in *Parables from Nature by Margaret Gatty, With a Memoir by her Daughter Juliana Horatia Ewing*, First Series, London: George Bell and Sons, 1885, p. xv, quoted in Wendy R. Katz, ed., *The Emblem of Margaret Gatty*, New York: AMS Press, 1993, p. 33)。従って、木原貴子、依岡道子「ヴィクトリア朝における知的職業に携わる女性たち (2)——雑誌編集に関わる女性——」『名古屋女子大学紀要』第49号（平成15年3月）、221頁における「アンデルセンを評価した」という指摘は不充分で適切とはいえない。他に子供向け雑誌、*The Boys of England*や*Chatterbox*が1866年11月発刊された。これらの活況には、作家が読者としての子供の価値を認めたことや、テニエル画のアリスに代表される木版挿絵の人気など諸要素が考えられるが、ここでは古典的研究、F. J. Harvey Darton, *Children's Books in England, Five Centuries of Social Life*, revised by Brian Alderson, 3rd ed., Cambridge: Cambridge UP, 1982を挙げるにとどめる。

3 Alfred Gatty, *A Life at One Living*, London: Bell & Sons, 1884, p. 166, quoted in Sheffield, p. 68.

4 これはカメラリウスなどルネサンス期の博物学的エンブレムに興味を持っていたという自伝的事実とも関連する (Kats, 24)。ゲスナー以後の博物学の発展におけるルネサンス期の博物学的エンブレムの影響については、William B. Ashworth, Jr., "Emblematic natural history of the Renaissance" in *Cultures of Natural History*, Cambridge: Cambridge UP, 1996, pp. 17–37を参照。

5 女性が科学的な活動に熱心に関与した点については、すでに多くの考察がされている（Sheffield, p. 139, n. 4参照）。

6 クォールズの『エンブレム集』におけるディヴォーションについては、カール・J・ヘルトゲン著、川井万里子、松田美作子訳『英国におけるエンブレムの伝統——ルネサンス視覚文化の一面』(慶應義塾大学出版会、2005年)第2章参照。なお、ディヴォーションという語について、ヘルトゲンの序章の訳注8 (274–75) において、詳しく解説したが、ここでもこの語は、賛美や祈りのうちに神と親しむ実践的な経験の意で用いる。

7 *Parables from Nature*からの引用は、Margaret Gatty, *Parables of Nature, With a Memoir of the Author by J. H. Ewing,* with a Introduction by Suzanne Sheffield, Science for Children, vol. 5 (Bristol: Thoemmes Press and Tokyo: Edition Synapse, 2003) による。

8 雲雀は文芸において、言及されることの多い人気のある鳥のひとつである。Michael Ferber, *A Dictionary of Literary Symbols,* Cambridge: Cambridge UP, 1999, p. 105によれば、天高く舞い上がる様子から、宗教的な連想を呼び、多く天上の世界と結び付けられる。一例としてスペンサー、*Fairy Queen,* 1.11.51や、プラトニックなシェリーの雲雀を挙げておく。(この詩の解釈については、Stewart C. Wilcox, "The Sources, Symbolism, and Unity of Shelley's Skylark," *Studies in Philology* 46 (1949): 560–76を参照。)

9 蝶、および蝶の変体は古来より魂のアレゴリーとして、しばしば表現されてきたが、その豊かな象徴表現についてはまた論を別にして述べたい。

10 こうした肉身から霊身が抜け出ている図は、フィリップ・アリエスが引いたように、ウィリアム・ブレイクや、当時の心霊写真などにもみられる。〔図4、フィリップ・アリエス著、福井憲彦訳『図説死の文化史——ひとは死をどのように生きたか』日本エディタースクール出版部、1990年、265頁〕アリエスは、ブレイクの考える死後存続する霊は、物理的な存在でキリスト教で言う永遠の命を持つ魂と区別しているが (265–67)、マーガレットはこの霊身を魂と区別していないと筆者は考える。

引証文献

Bate, John. *A Cyclopaedia of Illustrations of Moral and Religious Truths; consisting of Definitions, Metaphors, Similes, Emblems, Contrasts, Analogies, Statistics, Synonyms, Anecdotes, Etc.*, 2nd ed. London: Elliot Stock, 1865.

Gatty, (Mrs.) Alfred. *A Book of Emblems, With Interpretations Thereof.* London: Bell

and Daldy, 1872.

——. *Parables from Nature by Margaret Gatty, With Notes on the Natural History; and Illustrations by W. Holman Hunt, Otto Speckter, L. Frolich, E. Burne Jones, Harrison Weir, J. Tenniel, J. Wolf, and Others.* London: George Bell and Sons, 1882. Reprinted by Bristol: Thoemmes Press and Tokyo: Edition Synapse, 2003.

ヘルトゲン、C. J.、川井万里子、松田美作子訳『英国におけるエンブレムの伝統——ルネサンス視覚文化の一面』慶應義塾大学出版会、2003年。

Kats, Wendy R. *The Emblem of Margaret Gatty: A Study of Allegory in Nineteenth-Century Children's Literature.* New York: AMS Press, 1993.

Sheffield, Suzanne Le-May. *Beyond the Mask of Gender: Three Victorian Scientist-Naturalists* (Diss.). Michigan: Proquest, 2005.

Spurgeon, Charles Haddon. *Lectures to My Students.* Pasadena, Texas: Pilgrim Publications, 1990.